

知らぬ傷み 知る悲しみ

花色 央人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

魔王の息子ラハールとその家臣であるエトナは自らの城に仕掛けられていた隠し扉を見つけた。

そこで見つけたのは記憶を無くした青年。

混乱が起きる中、魔界、天界、人間界という歯車が青年たちを中心に噛み合い始める。

注意 オリ主視点のため、多くの原作会話がカットされています。また、会話がないことで特定のキャラへの印象を悪くしてしまう恐れがあります。そのため原作プレイを推奨します。

目次

一章	鎖の中で	1
2章	天使見習いフロン	6

一章 鎖の中で

1章 鎖の中で

魔王クリチエスコイ死す。

偉大なる魔王の死に魔界全体が揺れていた。

魔王を慕っていたものは嘆き、魔王を敵視していたものは歓喜した。

そんな中、魔王の息子ラハールが眠りから目を覚まし、新たな魔王を名乗り出す。

それから数ヶ月後のある日、魔王城を歩いていたラハールとその家臣であるエトナは隠されていた扉をみつけた。

「殿下ー。どうしますー？どう見てもあやしげな階段が続いてますけど」

「決まっているだろう。俺様の城だ。何があるか見なければ気が済まん」

「ですよねー。それにしても、クリチエスコイ様は何故こんなところを作ったんですかね？」

「知らん。親父のことだ。所詮ろくでもないものがあるのが山だ」

ラハールとエトナは話ながら階段の降り始めた。

階段は螺旋状になっており下を覗いてもまったく地面が見えないほど深く作られていた。

「長い・・・長すぎるー！どういうことだ！どう考えても魔王城の下にあるマグマに入っているだろうー！」

「殿下ー多分この空間はクリチエスコイ様の空間魔法がかけられてますよー多分さっきの扉もクリチエスコイ様の血族しか開けられないような仕掛けでしたし」

「・・・なるほど。しかしそれにしても嚴重だな。親父はそこまでして何を隠したかったのだ。」

素晴らしい面倒臭くなったラハールたちは階段を飛び降りた。

長い間空中をさまよって、ようやく地上に着いたラハールたちが見

たのは白い空間であった。

白い床白い壁、どこも白に幾何学的な模様が描かれていて、まるで異世界に来ているような錯覚が起きるようである。

「なんだこの気色の悪い場所は。」

「本当ですねー。しかし、クリチエスコイ様がこんな場所を作るなんて、い、」

ラハールたちが真っ直ぐ続いている廊下を歩いていくと一つの白い扉に辿り着いた。

「・・・む。」

「魔法がかけられていますね。」

これは随分また緻密なものをクリチエスコイ様も作りませんでしたねー。」

「・・・」

エトナが扉に書かれていた魔法の模様に感心している間、ラハールはその模様が頭の隅に引つかかるものを感じた。

「エトナどいている」

「はい？」

「素晴らしいエトナを離れさせ、ラハールは扉の模様とまったく同じ模様の魔法式を編み出す。」

「凄いですよ殿下！どうしたんですかその魔法は!?!」

エトナが心底おどいているとラハールは腕を組んだまま考え込んでいる。

「・・・わからん。」

「はい？」

「分からんと言っているのだ!」

「でも今できてたじやないですか。」

「知らん。やろうと思っただけでできただけだ。とにかく扉が空いたのだ中に入るぞ」

「素晴らしい中に入ったラハールたちは中に入り絶句した。」

「こ、これは」

「・・・なんだと」

扉の中は鎖が部屋の中心から広がっていた。
その鎖に吊るさされている物は。

「人間・・・？」

エトナが拍子を抜かれている中、ラハールはずんずん人間に近づき、

鎖を引きちぎった。

「え、殿下いいんですか？そんなことして。」

「いいも何も、この城は俺様のだ。何もしようと俺様の勝手だ。」

そう良いながらラハールは他の鎖を引きちぎり始める。

そしてすべての鎖を引きちぎったところで人間が目覚めました。

「・・・ここは」

人間は男だった。背は170cm程で、

綺麗な黒髪を肩まで下げ、垂れ目気味のせいか端正な顔立ちはどこか病弱そうに見える。

「ここは魔王ラハールの城だ！」

人間よ！ここで何をしていた！」

「殿下ーどう見たって監禁されてたんですから何をすることもないじゃないですかー？」

「うるさいぞ！エトナ！」

そんなやり取りを見た男は突然頭を抱え始めた。

「、、ダメだ。ダメだダメだ。」

何も思い出せない。

私は誰だ。どうしてここにいる。

ラハール。エトナ。懐かしい響きなのに何故思い出せない」

「なに？貴様は俺様たちの名を知っているのか？」

「分からない。分からないから困っているんだ。私は何も思い出せない」

男の様子を見て、ラハールたちも男が嘘をついていないことが分かった。

「どうします殿下ー。めんどくさいですし、殺しちやいます〜?」

エトナの提案にラハールは少し考え込んでから否定した。

「いや、こいつは俺様たちのことを知っているようだ。思い出したら何か親父のことで使えるかもしれない。」

「クリチエスコイ様のことですか?」

「そうだ。親父がこいつをここに封印してたつてことはこいつと親父はなにかしら関係あるはずだ。それにこいつがこんなところにいたのもまだわかっていないからな。」

自分の命運を目の前で話されている中、男は自分の手を見つめていた。

「?何をしているのだ」

ラハールの問いに答えたのは突然男の手に現れた、無骨なバスターソードだった。

「!? 貴様! なんのつもりだ」

突然の出来事にラハールは後ろに下がる。

「・・・驚かしてすまない。今私が思い出したのは私がこれを使うことができるということだ。」

そう言うのと男の背の丈程あったバスターソードが一瞬で消えた。

「どういうことだ。貴様は本当にそれしか思い出せないのか」

未だに敵意を消さないラハールに男は両手を上げ、無抵抗なことを表す。

「すまない。本当に私はこれしか思い出せないようだ。」

男の雰囲気からラハールたちも戦闘体制を解いた。

「ふむ。貴様は人間の癖にそこそこできるようだな。面白い! いいだろうお前を我が家臣に連れてやるぞー!」

「えー! いいんですか殿下!? こいつめちやくちや怪しいじゃないですか!?!」

エトナは説得を試みるがラハールは逆にムキになり男を家臣にしようとした。

「ふむ。私があなただの家臣になるのはいいでしょう。しかし」

そんな中、男はラハールに一つの願いを伝えた。

「なんだ？」

「私に名前をください」

男の提案に心底どうでも良さげにラハールは頷いた。

「いいだろう、そうだな貴様の名は・・・ネロだ」

名づけられたネロは満足そうに頷いた。

2章 天使見習いフロン

2章 見習い天使フロン

ネロがラハールの家臣となり早3か月、ネロの仕事は最初は主に雑用だけだったが一度書類仕事をやらせてみるととんでもなく有能だったため、魔王城の仕事はほぼネロが受け持っている状態となっていた。

「プリニーさん これを議会で提出しておいてください」

「アイアイアサー」

「殿下 おやつは自費で払ってくださいといってるはずですが」

「いいだろう！俺様の金だ！」

「では、殿下のお小遣いから引いておきます」

「エトナさん プリニーさんの給料を勝手に割り引かないでください」

「えーいいじゃん。」

「よくありません。プリニー斡旋所から苦情が来ていますよ」

「ゲツ・・・」

.....

「ふう・・・やっと一息つきました。殿下たちの無駄使いを抑えるのも大変ですね」

夜12時を過ぎて仕事が落ち着いたネロは魔王城の周りを散歩していた。

中庭を通り広間を通りそして外に出た。

外から眺める魔王城は物静かで周りのマグマに照らされているところは神秘的だ。

「.....」

そんな魔王城を眺めているネロの頭の中はいつもモヤモヤと霧がかかっていた。

(何も思い出せないとはこんなにももどかしいこととは――)

自嘲気味にネロは笑う

この3か月の間で思い出せたのは自分の戦い方のみ。

そんなものネロからしたらどうでもいいことだ。

(早く何もかも思い出したいですね・・・)

ネロは夜の散歩を終え、広間に戻ると見慣れない人影がネロの前方を走り去る。

その人影はどう見てもラハールの部屋を指しているため、ネロはすぐに人影を追いかけた。

「ふふふ、私ったら忍者になれるかもしれませんね」

ネロが到着した時、先の人影と思われる少女がラハールの寝床の横で笑っていた。

「残念ながら忍者はあんなに音を立てて走りませんし、しゃべりません」

「へッ!? 誰ですか!?!」

驚いてすぐにこつちを振り向く少女にネロはバスターソードを向ける

「それはこちらのセリフです。殿下への面会時間は過ぎてますよ。もつともそんなものありませんけど」

少女は慌てて杖を取り出す。

「害意があると言うのならそれ相応の対応はさせていただきますよ。」

ネロの身体から鬨気が溢れ出し、少女はつい後ずさりをしてしま

う。
「ちよつと待って下さい! 貴方は人間じゃないですか! なんでこんなところにいるんですか!?!」

「そういう貴方は天使じゃないですか。天使が暗殺とは世も末ですね。」

対して少女は何かを言おうとするが、その言葉を飲み込んで杖を構えた。

「」

少女が呪文を唱える前にネロのバスターソードが少女の杖を弾き飛ばし、喉元にバスターソードを突きつけた。

あっけない終わりだと思われた。が

「うるさいぞー！お前ら!!！」

ネロは突如発生した魔法をバスターソードで切ったが、少女はよけ切れず、そのまま魔王城の外へ飛ばされてしまった。

「……殿下。寝ぼけて魔法を打つのはやめて下さい。」

「お前らがうるさいのがいけないのだ！」

ラハールの触覚が伸び切っていることでラハールの怒り具合が伺える。

「しかし、殿下の命を狙う天使が飛んで行ってしまいましたよ。」

「……なに？そんな奴がいたのか？」

「はい。さつきまでそこに」

素晴らしいネロが指をさした先にはラハールが吹き飛ばした壁の残骸があった。

「……探しに行くぞー！俺様の命を狙うとは！とんでもなく馬鹿な天使がいたようだな！エトナ起きろー！」

「何ですかー殿下ー。こんな真夜中に……」

「俺様の命を狙う天使が現れた！さつきと探しに行くぞー！」

「えー、本当ですかーそれ？」

もし、そうだとしてもネロが捕まえてるんじゃないですか？

目を擦りながらエトナがネロの方を見る。

「……ネロにだってミスはあるのだ！行くぞー！」

そんなラハールの様子を見たエトナがラハールの後ろにあった瓦礫に気づいて、察したのかニヤニヤし始めた。

「はいはい。行きますよー。おいプリニー共、殿下が飛ばした天使を探しにいけー！」

エトナの言葉に顔を真っ赤にさせるラハール。

「殿下。私はどうしましょうか。」

「……お前がいると俺様が活躍できないからな。お前はいつも通りにしている」

「わかりました。」

そうしてラハールたちはネロを置いて時空の扉に向かって行った。

残されたネロは自分の感情に戸惑っていた。

あんなに強く言うことは普段ではありえないのに。自分は何故あの天使にこれだけ怒りを感じているのだろうか。

「・・・私らしくないですね。」

いや、これが私なのでしょいか。

それさえも自信が持てないなんて、人としてどうなのでしょう」

ネロは悲しげに自分の手を見つめ、

その場を立ち去った。